

2024

2

令和6年2月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻366号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

# とあるお



公益財団法人  
さわやか福祉財団

この度の能登半島地震により

亡くなられた皆様に深く哀悼の意を表しますとともに、

被災された皆様、ご家族・関係者の皆様に

心からお見舞い申し上げます。

さわやか福祉財団は、「地域助け合い基金」に新たに自己資金を拠出して

被災地・被災者の皆様への助け合い活動を応援するとともに、

復興に向けた地域づくりのお手伝いを続けてまいります。

公益財団法人さわやか福祉財団

理事長 清水 肇子

# さあ、言おう

2024年2月号

## CONTENTS

### 2 新しいふれあい社会 実現への道

## 広域避難で支え合う仕組みづくりを

清水 肇子

### 4 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

## 一つの家族をみんなで支える 小さな地域共生社会を目指す

いいね！大羽根 地域まごころサポート（三重県菰野町）

### 10 いきいき わくわく 子どもと一緒に地域で輝こう

## 大人も子どもも 自由に遊んでつながる居場所

NPO法人柏倉家文化村／みんなの居場所「岡縁里」（山形県中山町）

### 16 「地域助け合い基金」助成先のご紹介／状況のご報告

### 20 連載 37 老いの暮らしを創る

## 整える

福祉ジャーナリスト 村田 幸子

### 22 連載 人生100年時代を生き抜く知恵 ジェンダーの視点から 18

## 天災は忘れる間もなくやってくる

お茶の水女子大学名誉教授 袖井 孝子

### 新しいふれあい社会づくりに向けて

26 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・ご寄付者の皆様のご紹介

27 活動日記（抄）

24 「地域助け合い基金」ご寄付のご案内

26 みんなの広場 / 投稿募集

28 さわやかパートナー・『さあ、言おう』のご案内 / 表紙絵から

助け合いを広げよう / 新・ひとりごと・鶴山 芳子

# 広域避難で支え合う仕組みづくりを

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

能登半島を中心に甚大な被害が発生した大地震から1か月ほどが経った。地元の関係者もとより全国から緊急支援の応援隊が入り、生活に必要なインフラは少しずつ回復してきたというが、いまだ安否のわからない方々もいる。被災された皆さんを思うと一日も早い復旧・復興をと心から願うが、落ち着いた暮らしができるようになるには相当な時間がかかることは覚悟しなければならぬだろう。特に今回は、ウィズコロナの中での初めての大規模な自然災害であり、支援する側としても配慮しながら、息長く支援のお手伝いができればと考えている。

さわやか福祉財団は災害発生時の緊急支援を行う組織ではないが、それでもこれまでの大地震の被災地や被災者の方々に向けて、協働仲間である全国のさわやかインストラクターの皆さんと共に避難所等を訪ねて具体的なニーズを踏まえて希望の物資を提供したり、またその後の復旧・復興に向けた地域の活動支援を及ぼすながら行ってきた。

そうした経験からいえば、災害大国といわれる日本で、そろそろ災害時の避難所の設置方法や、さらには広域避難の仕組みを本気で考えるべきだろう。「日本の避難所はソマリアの難民

キャンプよりひどい」という報道もなされるほどで、緊急事態とはいえ衛生・安全環境をどう整えるか、その見直しは、今後巨大地震が見込まれる中で急務といえる。その際、避難所の場所も地元近くに拘らない広域を仕組み化する。それも発災からできるだけ時間をかけずに、まずは生活インフラが整っている場所へ避難する。そのための移動手段やルートも考慮しておく。地元に残っていたという気持ちは痛いほどわかるが、躊躇する気持ちの大きな理由は、その後どうなるかがわからない、知らない土地で不安な状況でバラバラになって過ごしたくないというものだ。したがって、家族はもとより同じ地域の皆でまとまって避難先で暮らせるように、その避難先と自宅地域とは無料で定期的に移動できるように、そして復興に関して自治体からの情報がしっかり届くような仕組みを構築していくことが大切となる。今回の地震では、自治体同士をペアにする対口支援での効果が挙げられている。その枠組みを平時からの避難予定の連携の仕組みとしてさらに広げていくことはできないだろうか。

そしてこうした災害が起きた時、改めて感服するのが、馴れない環境の中で不安や悲しみを抱えながらも互いに支え合って前に進んでいくこととしている被災者の皆さんや、そうした方々に寄り添い、応援する助け合い活動関係者の皆さんだ。被災を受けて地域で暮らしていくには、どこであれ公的支援だけではまかない切れない生活ニーズが様々に発生する。必要な生活支援を、心のサポートも含めてきめ細かに互助で展開する仕組みの強化も不可欠といえる。

さわやか福祉財団では地域助け合い基金に自己資金を拠出して、能登半島地震の被災地・被災者を支援する地域の助け合い活動を応援していく。

ぜひ皆様からあたたかいご寄付をお寄せいただければ幸いです。



# 一つの家族をみんなで支える 小さな地域共生社会を目指す

いいね！大羽根 おおはね

地域まごころサポート ちよものちよつ (三重県菰野町)

三重県北部の菰野町にある大羽根園は、一戸建て住宅約1000戸の広大な団地です。親類縁者はほとんどおらず、一人暮らしの世帯が多くなる中、住民の孤立は進み続けました。そんな中、大学の協力による意識調査や住民同士の意見交換がきっかけとなり、団地内に「地域の茶の間」がオープン。そこから住民主体の助け合い活動へと発展しました。全国で高齢化が進む団地の参考となる取り組みです。(取材・文/東田 勉)

ご近所、ボランティア、専門職……  
さまざまな人が出入りする家

菰野町は、人口4万1028人で高齢化率26・5% (2023年10月1日)

現在)。菰野、鶴川原、竹永、朝上、た約1000戸の一戸建て団地だ。千種の5地区からなり、一番広い菰野 取材した日、団地内の名坂ユキさん 地区の西側には、「大羽根園」という (91歳) 宅では、「いいね！大羽根 広大な団地が広がっている。今から60 地域まごころサポート」の提供会員、 年前、1963年から開発・分譲され 市川伴子さん (81歳) による家の中の



まごころサポートの活動の様子  
(市川さんによるトイレ掃除と、松永さんによる庭木の剪定)

掃除と、松永楠男さん（80歳）による庭木の剪定が行われていた。名坂さんは4年前に夫を亡くしてから、まごころサポートの利用会員になった。58年前にこの団地へ引っ越してきたときは、夫婦と3人の息子、自身の母親も同居し、一時は夫の親を含む7人で住んでいたという。現在は名坂さんと、障がいを持つ次男（65歳）の二人暮らしだ。買い物は、近所の人たちが「今日は何を買ってこようか」と聞きに来る。料理は得意なので自分で作る。次男は障がい福祉分野のサービスを受けてい

たが、本人が65歳になったのを機に介護保険に切り替わった。名坂さんの家には、ご近所さん、まごころサポートのボランティア、次男のヘルパーやケアマネジャーなど、さまざまな人が出入りする。ここはまるで、小さな地域共生社会のようだ。「毎日顔馴染みの人たちが来てくれて、みんなに助けられています」と名坂さんは笑う。まごころサポートでは、4人のボランティアがローテーションを組んで名坂さん宅で活動する。市川さんも松永

さんも活動  
立ち上げ当  
初からの会  
員で13年目。  
換気扇の手  
入れなど高  
い所の作業  
を任される  
という松永

さんは、この活動の良さをこう語る。「顔馴染みになるとこちらでも活動しやすいです。利用会員さんは、困りごとの助けだけでなく話し相手も欲しいのだと思います。活動中に私について歩きながら話す人もいます」市川さんも、「楽しいですよ。いつまで続けられるか分からないけれど、その後は私がやってもらいう側になるから」と微笑む。



提供会員の松永さん（左）と市川さん（右）



利用会員の名坂さん

## もっと住民同士が集まって 協力し合える楽しい仕組みを

近所の人たちが名坂さんの家に頻繁に顔を出し、用事はないかと声をかけるのは、名坂さんが大羽根園のために尽くしたことをみんなが覚えているからだ。大羽根園に町内最初の「いきいきサロン」をつくり、70歳以上の一人暮らし高齢者にお弁当を届ける「ふれあい弁当」を12年間も続けたのだ。

名坂さんの後を継ぐように大羽根園の助け合い活動をリードしてきたのが安田順子さん（75歳）だ。安田さんは、企業戦士だった夫が64歳で若年性アルツハイマー病になったのを機に、助け合い活動との縁を深めた。

安田さんは以前、菰野町社会福祉協議会の登録ヘルパーをしていた。その後、町社協職員となって「いきいきサロン」を33か所立ち上げている。そんな実績を持つ安田さんだが、夫の介護

をしながら行うサロン立ち上げ活動に、ある疑問が湧いたという。

「私がいなければサロンができないのはおかしい。もっと住民同士が集まって協力し合える、楽しい仕組みがつかれないだろうか」と。

そこで安田さんは、2006年頃から全国のボランティアフェスティバルをまわり、打開策を探し始めた。そんなとき出会ったのが、支え合いのしくみづくりアドバイザーで、現在は新潟市の地域包括ケア推進モデルハウス「実家の茶の間・紫竹」代表も務める河田圭子さんだった。河田さんから、「あなた自身が助けてほしいのだから、『助けて』って声を上げるといいのでは。そうすれば、周囲に助け合い活動ができるんじゃない？」とアドバイス



まごころサポート代表の  
安田さん

を受けた安田さんは、助け合い活動づくりにまい進することになる。河田さんの元へ幾度も通い、その思いと手法を吸収した。

## 助けてほしかったから始めた 居場所と助け合い活動

07年、大羽根園で団塊世代層のニーズを探る大規模な意識調査が行われた。四日市大学の岩崎恭典教授（当時）、四日市看護医療大学の東川薫准教授（当時）協力の下、①高齢者支援、②防災活動、③子育て支援、④世代間交流の4テーマが設けられ、調査の後には意見交換会も開かれた。安田さんたちは、高齢者支援を選んで勉強を始めた。ここでは、地域住民が集まれる居場所の必要性についても話し合われたという。

そして10年4月、新潟市で広がっていた「地域の茶の間」を手本とした大羽根園の「地域の茶の間」がスタート





公会所に掲げられた  
「地域の茶の間」の看板



「地域の茶の間」での歓談風景

した。毎週火曜日の10～15時まで公会所を開放し、1日400円で気軽に住民同士が交流できる場所だ。安田さんは、脳梗塞を起こした認知症の夫を働きながら介護する多忙な日々を送っていたが、言語障害のある夫が茶の間でニコニコしている姿を見て、心から「よかった」と思った。

茶の間の仲間との相談はその後、まごころサポートの立ち上げへとつながっていく。2回にわたって河田さんを

サポート」と定めて活動を始めた。「河田さんに言われた通り、私が助けてほしかった。だから、助け合い活動を立ち上げたのです」と、安田さんは当手を振り返る。

### お互い様だからこそ 大事なルールづくり

まごころサポートは、利用会員、提

迎え、「住民参加型在宅福祉サービス」の勉強会を開催したほか、提供員を養成する「地域まごころサポーター養成講座」を4回開催した。そして11年秋、大羽根園で設立準備会を開き、名称を「いいね！大羽根 地域まごころ供会員、賛助会員の3者から構成される。利用会員は日常生活で手助けを希望する人、提供会員は日常生活上の手助けができる人で、どちらも年会費1000円。賛助会員は活動に賛同し支援してくれる個人および団体で、年会費は個人1000円、団体5000円。

活動内容は多彩だ。買い物を代行する、買い物に同行し手助けや荷物持ちをする、調理や掃除の手伝い、ごみ出し、留守番・見守り・話し相手、受診付き添い、受診内容や治療方針を家族に伝える、など。医療行為や身体介護以外の困りごとについて、何でも相談を受け付ける。利用希望の電話が入ると、コーディネーターが訪問して希望内容を聞く。相談の上、活動内容・時間などが決まったら、決められた日時に提供会員が訪問して活動する。

利用会員が払う謝金は、1時間800円、2時間目以降700円。提供会



町社協が主催する地域サポーター養成講座。ここからまごころサポートの提供会員も育っていく

員が受け取る謝金は1時間700円だ。集計は月末ごとに行い、翌月上旬に利用会員から集金して、中旬までに提供会員へ支払われる。

まごころサポートは「利用会員へのお願い」や「提供会員の心構え」など、細かなルールを決めている。これらのルールや活動の理念、仕組み等が書き込まれた『地域まごころサポートガイドブック』

は、河田さんから提供されたものがベリスとなっている。

「利用会員の秘密を堅く守る」「金品のやりとりをしない」「おじいちゃん、おばあちゃんなどと呼ばず名前前で呼び、丁寧話す」「提供会員の考えを押しつけない」「お互い様の心を忘れない」など、これらの約束事は、提供会員、利用会員どちらの人生も大事にし、地域で安心して暮らすためのものだ。

### 介護保険で支えきれない生活を みんなで支え合おう

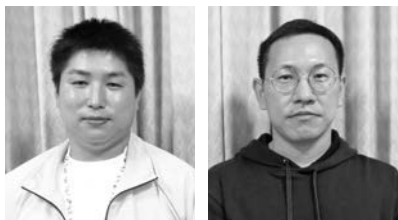
まごころサポートは現状、コーディネーターを安田さんが1人で担い、利用会員25名、提供会員25名、賛助会員は個人のみで10名ほど。事務所は安田さんの自宅で、最初の1時間の謝金の差額100円を運営費としているのみだ。団地の規模から考えるとこぢんまりした印象を受けた。そこで、安田さんにこれからの抱負をたずねてみた。

コーディネーターを増やすなど活動の規模を広げていきたいという思いが語られると思ったが、「名坂さんのようなケースが増えることが理想」という答えが返ってきた。ユキさんと次男、都会に出た息子、ヘルパー、ケアマネジャー、訪問看護師などの専門職、隣近所で気にかけてくれる人たち、そしてまごころサポートのようなボランティア団体など皆を巻き込んで助け合う、そんな地域共生社会を目指しているのだという。助け合いに対する安田さんの信念が感じられた瞬間だった。

次男を担当するケアマネジャー、徳田朋子さんは、「名坂さん宅に介護保険のヘルパーだけでなく、ボランティアアさんや近所の方々が入ってくださることは本当にありがたい」と話す。ケアプランでは次男本人へのケアしかできない。一緒に暮らしている高齢の母親（ユキさん）を、介護保険サービスではできない部分で周囲の人たちが支



名坂さん宅で次男を担当するケアマネジャーの徳田さん（左）と第1層SCの舟久保さん（右）



菰野町社協の三浦さん（左）と渡邊さん（右）

えてくれているのがどれだけ助かるか、痛感する毎日だというのだ。

\* \* \*

政などからの押し付けではなく、住民自身が助け合いを自分事と捉えて動き出すのをSCとしてサポートしていきたいという。

らしや高齢者世帯が大半を占める。それでも希望が持てるのは、まごころサポートという「安心」があるからだ。こうした取り組みを参考にしてもらえたらと願う。

菰野町では、5地区のうち大羽根園に続いて千種、竹永、朝上の3地区と、菰野地区の東側の菰野東にも生活支援グループが誕生した。あと1地区について第1層SCの舟久保智哉さんは「必要性を感じながらも住民主体の動きが出てくるのを待っている」と語る。全地区に第2層協議体があるので、行

な住民参加の助け合い活動はどう見ているのだろうか。職員の渡邊武史さんと三浦健太郎さんに聞くと、「大羽根園だけでなく、他の地域にも生活支援活動が立ち上がってきたことは、町民の困りごとを知る町社協としても本心に心強い」と口をそろえた。全国に、老朽化した団地は多い。大羽根園は一戸建てなので、多くは建て替えやリフォームを終えているが、住民は一人暮

### いいね！大羽根 地域まごころサポート

菰野町にある大規模団地「大羽根園」の住民を対象に2011年11月から始まった助け合い活動。「ちょっと手伝ってほしい人」「ちょっと手助けできる人」「まごころサポートを応援したい人」が会員になり、有償ボランティアで助け合う任意団体。利用会員（支援を受けたい人）と提供会員（支援できる人）をコーディネーターがマッチングし、利用料は1時間800円、活動費は1時間700円（差額の100円は運営費）が基本。

- 連絡先／〒510-1245 三重県三重郡菰野町  
大羽根園松ヶ枝町13-13  
電話 090-6352-8411（コーディネーター直通）  
受付時間 月～金曜日の9～12時

／いきいき わくわく／

## 子どもと一緒に 地域で輝こう



# 大人も子どもも 自由に遊んでつながる居場所

NPO法人柏倉家文化村／みんなの居場所「岡縁里」おかえり（山形県中山町）

黒堀が続く歴史ある町で、空き家のままとなっていた旧農家が、地域の拠点として住民の力で再生。年代にかかわらず自由にふれあう関係が醸成されています。雪がうつつすらと積もり始めた年の瀬、にぎやかな餅つき大会を取材しました。

（取材・文／境 朗子）

### ● 住民の力で旧家を再生

ペタン！ ヨイショ！ 大きな杵を懸命に持ち上げる小学生たち。「重い！」「やった〜」。餅つきに生まれて初めてトライして満足げだ。台所では、お餅料理の下ごしらえで大わらわ。男性シニアも手慣れた様子で大根を下ろす。

昔は農作業小屋だった建物の土間に鎮座する大白は、ハレの日を何世代にもわたり祝ってきた。

上がり框がまから小上がりに続くこの広い空間に、農具や農作物が置かれていたのだろう。目を向ければ、随所に納屋の扉や桶のふたなど昔の民具をリメイクした家



約700坪の敷地にある旧柏倉喜作家の農作業小屋が岡縁里の拠点



大人たちは餅料理の準備に大忙し



子どもたちが大人に教わって初めての餅つき

具が配置されている。まるで民話の世界に入り込んだような懐かしさが漂う。

山形県中央部に位置する中山町の岡地区は、国指定重要文化財である近世の上層農家・旧柏倉家が屋敷を構え、風情あふれる町並みが訪れる人々を魅了する。けれど、その総本家

から北200メートルほどの地では、分家の旧柏倉喜作家が空き家となり、広い敷地には雑木や雑草が生い茂るままになっていた。高齢化は進み、町は元気を失っていくばかり。そこで町

内外の住民が立ち上がり、柏倉家の周辺をフィールドに町づくりや文化振興を推し進めようと、「NPO法人柏倉家文化村」を設立。地域の拠点とすべく、喜作家の農作業小屋と、今は取り壊された母屋につながっていた畳敷きの長い廊下などを整備・再生させた。そして、2020年に本格オープンしたのが「みんなの居場所『岡縁里』」である。「人と人がつながり、助け合う関係に発展するような『みんなの居場所』をつくりたいと思います」と同法人事務局の飯野桂子さん（60歳）は話す。

● **みんなに役割 やりたいことは、いくらでも**

高齢者を中心に20代から80代まで、同法人の会



クルミ餅、小豆餅、納豆餅、雑煮のお膳と梅シロップで、「お疲れさまでした！」



夏休み「こどもの岡縁里」

員と町内外の人々15名ほどが集まって交流が始まった。町から介護保険の通所型サービスBの指定を受けつつ、世話をする人とされる人の区別がないフラットな関係を目指した。毎週火・金曜日（土曜日は不定期）10〜15時に開催し、利用料は300円。敷地を耕し、野菜や果物を収穫。200円の昼食作りは3名ずつの当番制だが、来ているみんなでワイワイガヤガヤ準備する。メニューは、そのときどきに畑の野菜と相談。近隣の人が持ち寄ってくれた食材も合わせて決めていく。自

給自足のように回していけばお金がかからないし、充実感も得られる。

男女の割合はほぼ半々。居場所というに参加者の多くが女性というイメージがあるけれど、岡縁里はさにあらず。なぜなら「男性みんなに役割があつてイキイキしている」（同法人代表理事・飯野清治さん、70歳）からなのだから。

その日のプランはほとんど決められていない。自分がやりたいことをやるのが基本。仲間が必要な場合は声をかける。岡縁里という宝の埋まった場に立てば、やりたくなることがいくらかでも姿を現すのだという。

「岡縁里で使いたいものがあると、買わなくても誰かが蔵とか植物が茂る庭から材料を見つけて素敵に作ってくれます」と同法人事務局長の平山芙実さん（33歳）は言う。

## ● 子どもたちも、家庭とは違う場で

「竹のジャングルジムを作りたい」。そんな長年の夢を岡縁里で果たしたのが多田慎二さん（40歳



・町議会議員）だ。製作協力者をオンラインで募り、近所の人からいただいた竹を切って素朴で丈夫なジムを組み立てると、子どもたちが目を輝かせた。餅つきを終えた小学3年生の女子は「一番早くジムに登れた。家ではそんなことはできないし、楽しかった」と誇らしげに言う。送り迎えをする祖母（60歳）も、「クラスの子と一緒になくても『一人で参加しても楽しい』と言って、岡縁里に行きたがります。『お姉さんとかおばあさんとか、いろんな人と一緒に料理を作れる。掃除だってやるのは当たり前』とも。のびのび過ごしていますね」と微笑む。家族という時間とはちよつと違う、自律的な振る舞いが見られるという。

祖父と一緒に岡縁里に来るという小学6年生の女子は、「もともと農作業をする小屋だったので変身したのはすごい。庭で採れた草花のスイーツも初めて食べました」と話す。

3姉弟だけでバスに乗って来たという小学2年生の男子は、「何でもやれて面白い。大人の人は優しいよ。夏休みは一緒にボール遊びをしました。

ここではお母さんに何も言われないうところがい  
い」とにっこり。

岡縁里にはあいにくボールがなかったけれど、  
小学生たちは「じゃあ、作ろう」とアイデアを出  
し合い、新聞紙を丸めてテープで留めてこしらえ  
たという。あるものを生かし、工夫する。自分次  
第で可能性が広がる場所なのだ。

## ●「いどもの岡縁里」

多様な人々が自由に集う岡縁里だが、平日開催  
も影響して子どもの参加は多くなく、大人たちは  
そのことがずっと気になっていた。そんな折、子  
ども支援に特化したNGOから助成金が出ること  
になり、昨年の夏休み期間に「こどもの岡縁里」  
の活動を始めた。終了時刻を17時に延長して週3  
日の開催にし、子どもの利用料は無料とした。昼  
食作りを手伝ったり、竹で食器を作って流しそ  
うめんを楽しんだり…。

「子どもも退屈しないで一日中遊んでいられる場  
所なんです。そもそも、来たい人が来て、した

いことをするのが岡縁里のコンセプト。大人も子  
どももお互い好きなことをやっている中で自然と  
共通点が見つかり、交流が始まります。大人がモ  
ノを作ったり野菜を収穫したりしていると、『教  
えてあげる』と言わなくても子どもは興味が湧い  
て、自分から寄ってくる。そんなシーンをよく見  
ます」とは同法人事務局・須貝幸司さん(69歳)。  
ヘビの脱け殻を拾った子どもたちが、持ち帰りた  
くて奪い合いになったときなど、子どもの眼差し  
や価値観に驚き、新鮮さを感じたという。

## ●みんな自由。でも、バラバラじゃない

岡縁里の敷地にある「O<sup>オ</sup>r<sup>ラ</sup>i<sup>イ</sup>c<sup>カ</sup>a<sup>フ</sup>e」は、  
収穫した野草のメニューや手作りスイーツなどを  
提供し、人気がある。齋藤由佳さん(26歳)は山  
形大学の大学院生だった頃、岡縁里を知って魅せ  
られ、カフェを一からつくってきた。

「町内外のマルシェなどに出店して宣伝すると、  
若いファミリー層が関心を持ってくださることも  
あります。子どもたちの参加も少しずつ増えて、





ユニークな外観のOrai cafe

正に多世代で熱くなってきた気がします。私自身の視野も広がっていくようで楽しいです」

岡縁里は、子どもが地域で見つけた新しい居場所としても認知され始めているようだ。

「今の子どもたちは、友だち同士で集合して誰かの家や公園などに遊びに行くことが少ない感じがします。家で留守番しなきゃいけない。塾がある。忙しいのです。大人社会を映す鏡かもしれません。

だからいろんな人と一緒にご飯を食べ、話したいことを話す。自分の力を信じて好きなことをやる。そんな居場所が地域にあることをもっと知ってほしいです。ね」と平山さん。

飯野桂子さん

人も「ここは包容力のある場所なのです。子どもたちも自分の思いを閉じ込めないで、自分にとって大事なものを探してほしい。きっと『自分も何かできる。成長できるんだ』と感じられると思います」と力を込める。

「みんな自由に、縛りなく活動しているけれどバラバラではない。子どもと共に自然にいられている場所だと思う」。柏倉家の分家、惣右衛門家10代当主で同法人理事でもある柏倉健一さん（89歳）は穏やかに語った。



前列左より、飯野桂子さん、柏倉さん、飯野清治さん。  
後列左・齋藤さん、右・平山さん

# 応援ありがとうございます！

## 「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会への取り組みや、コロナ禍での困りごと解決のための活動を支援している「地域助け合い基金」。今月号は、協議体での話し合いを経てスタートした有償ボランティアによる生活支援活動、バスの減便をきっかけとした移動支援、子育て世帯支援の活動を紹介します。

なお、このほかの助成先の活動報告も財団ホームページに随時アップしていますので、思いが詰まった多彩な活動をぜひご覧ください。

千葉県富里市

### 協議体での話し合いを経て 生活支援の有償ボランティアを開始

ひよし生活応援隊

助成金額 15万円

富里市は、2019年の地域フォーラムから生活支援体制整備事業を推進し、日吉台地区と日吉倉地区では、ちよ

っとした困りごとに対して助け合いによる生活支援が必要であることを確認。協議体で定期的に話し合いを続け、22年に「ひよし生活応援隊」を立ち上げ、「ちよこつとサービス」という名称で有償ボランティアの活動をスタートしました。

本基金の助成金は、協力員作業バッグや草刈り機等機材の購入、写真付き身分証明書作成費用、活動に伴う保険料として活用していただきました。

活動1年間で利用件数は300件、昨年現在の利用会員

は66名、協力員は39名。草取り、買い物代行、ごみ出し、建具の調整、パソコン操作、契約の同行など多岐にわたるニーズがありますが、それに応える高スペックの協力員がいることも団体の自慢です。また、協力員には障がい者施設の責任者も登録しており、粗大ごみ廃棄などを施設利用者も手伝って、施設からは地域住民との交流の機会ができて喜ばれているとのこと。

利用会員からは「こんなサービスを待っていた」「このサービスのおかげで、まだしばらくここにいられる」など、協力員の励みになる声をもらうそうです。

今後は、通院、集いの場、趣味など様々な目的にも利用できる移動支援の立ち上げに向けて頑張っていきたい、と報告を寄せてく

ださいました。



ちょこっとサービスの活動の様子

東京都調布市

## バスの減便を受け移動支援開始 地域交流と自治会近所力につなげる

タスクネット東京

助成金額 15万円

少しでも暮らしやすい地域にと、交通安全、生活安全をテーマに2013年に設立された「タスクネット東京」。朝の児童見送りや地域のパトロール等の活動を行ってきました。ここは、鉄道の駅がある市の中心部からバスで20分ほどの地域ですが、コロナ禍でバスが大幅に減便になり、バスを利用していただいていた高齢者が通院できなくなるなど生活に制限が出てきました。そこでタスクネット東京では、高齢者が引き続き外出し、乗り合わせた人同士の友人関係が広がり地域のつながりも強くなるように、「地域交通ふれあい号」を立ち上げました。市民ボランティアが空き時間に運転等を行い、車両はデイサービス事業所から提供されました。

本基金の助成金は、移動支援サービス専用自動車保険料、事務消耗品費、集会場使用料に活用していただきました。



ふれあい号運行の様子

計16回運行、30人の住民が利用。「ふれあい号運行に感謝」「自宅から安心して通院先まで行ける」等の声が寄せられました。安心して利用してもらうことで、自治会、近所力の支えになると考え、活動を続けていきます。

兵庫県神戸市

## お弁当配布と子どもの学習支援で 子育て世帯を応援

FigTree子ども食堂

助成金額 15万円

FigTree子ども食堂は、2021年設立。大人3

この活動により、21年には警視庁生活安全部や東京防犯協会連合会から感謝状も授与されました。昨年は

00円、子ども無料で、フードバンクから提供される食材やお弁当を子育て世帯に配布してきました。週2回のお弁当配布時には、利用者と顔を合わせ、様子を聞き、地域の人たちの居場所になりたいと活動しています。22年度からはお弁当配布の回数を増やし、新たに学習支援も行って、子どもの居場所づくりと学習習慣づくりをしようと本基金に応募されました。助成金は、学習支援の教材費、消耗品費、関係者の交通費に活用していただきました。

23年からは、感染対策を実施しながら高校生までの子どもがいる世帯が集まってご飯を食べる「夜カフェ」に5回で108人が参加。小学生を対象とした学習習慣を身につけるための放課後自習室に25回で250人が参加しました。

活動するにつれ、支援の必要な家庭があることが分かり、要支援家庭（一人親家庭、就学支援家庭、非課税世帯）には



FigTreeの活動の様子

# 「地域助け合い基金」 状況のご報告

優先的に予約してもらええる形もつくったとのこと。利用者  
の30%が要支援家庭だということです。また、ボランティア  
アを広く募った結果、高校生から60代までの幅広い人たち

に活動を手伝ってもらうことができたとす。  
「今後も、必要な方に必要な支援を届けたい」と報告を下  
さいました。

皆様のご支援により全国各地の助け合いを助成し  
ている「地域助け合い基金」。

1月15日までの状況をご報告いたします。

(1月15日 当財団ホームページ開示時点)

## ◎寄付受付額

220件

1億7353万7836円

このうち当財団より1億4162万1000円を供出

## ◎助成実行額

1058件

1億6480万6064円

地域助け合い基金は、地域共生社会の実現を目指  
し、助け合い活動のスタート・継続を支援していま  
す。引き続き皆様のご支援・ご寄付をよろしくお願  
い申し上げます。

(事務局長・内田)

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、  
助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参  
考にしてください。



クレジットカード  
決済ページ



財団ホームページ内  
基金関連ページ

●基金に関する情報、  
およびクレジットカード決済は、  
左のコードもご利用  
ください!

基金に関するご意見・お問い合わせ

<地域助け合い基金担当>

電話：(03) 5470-7751 FAX：(03) 5470-7755

メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

# 老いの暮らしを創る

## 整える

福祉ジャーナリスト 村田 幸子

今年は何日の出を見ようと、早起きしてホームの屋上へ。早起き

といってもこの時期の東京の日の出は7時少し前です。すでに数十人がカメ

ラ片手に待機していました。東の空がボォーと明るくなりみるみるうちに濃いオレンジ色のまん丸の太陽が昇ってきました。空には雲一つありません。思わず手を合わせていました。西の方を見るとたっぷりの雪を被った富士山が形のよい姿を見せており、明け方の空にはまだ月が残っていました。コートの襟を立てて寒さを凌ぎながら、何だかいい年になりそうだなと、明るい気持ちで部屋に戻ってきたのですが、夕方。

能登半島で震度7の大地震。翌2日には日

航機と海保機の衝突。今年は何女だし、初日の出も拝んだしと、何となく幸先よい気分です。迎えたのですが、御祝儀気分はどこへやら、落ち着かないお正月となりました。

今年は何詣には行かず最初の外出となったのは、身体のケアの為に治療院へ出向いたことです。身体の調子が悪くなってから治療に行くのではなく、日頃から身体の状態を良好にしておけば元気に毎日を過ごせると考えて実践していることを、私は身体のケアと言っています。

私には、股関節を除けばこれといった疾患はないのですが、時折身体全体が重くなりだるさや冷えを強く感じ体調を崩すことがあります。原因の一つは、運動不足によると思わ



れるのですが、かといって一般的なスポーツジムへ通って筋トレなどするのはとても無理。しかし健康づくりブームにあつて「運動が大事。身体を動かすことが健康の基本」などと声高に言われると、運動したくてもできない自分の身体の状態に、出るのはため息ばかり。そんな時見つけたのが「身体は鍛えるより整える」という考えで運営しているジムです。

そうか、身体は「整える」ことが大事なんだ。「整える」。つまり身体の具合を、本来あるべききちんとした状態に保つておくこと。「鍛える」より「整える」という考えが、ストンと腑に落ちましたし、健康づくりには身体を鍛えなければならぬという考えにのみ捕らわれていた私にとって、それは目からウロコの言葉でした。

「整える」方法は、身体を温め筋肉をほぐし、身体全体の歪みを取るといふもので、いわば身体のメンテナンス

ンスです。通つてみるとそれほどの身体的負担にならず、しかも常に身体は整えるのだという意識が働き、姿勢や歩き方に気を配るようになりました。しかし引越をしたことでそのジムと縁がなくなりましたが、運良く同じような考えで運営している治療院と出会い、昨年から定期的に通つて、不調のない身体づくりをし、老いの坂を登つて行こうと心がけています。

「鍛える」という言葉からは、頑張つて、頑張つて心身を強くするという悲壮感を感じますが、「整える」には何も無理することはないと、どこか肩の力が抜けた感じを受けます。整える大事さは何も身体だけではありません。暮らし全般に言えることです。元日の大地震で被災された人たちの暮らしはいつになったら整うのでしょうか。被災地にごく当たり前の日常に戻るまで、私たちは寄り添う姿勢を忘れてはいけないと心しています。



(むらた さちこ) 立教大学英米文学科卒業後、NHKにアナウンサーとして入局。報道番組のリポーターや社会性のある硬派の番組を中心に担当。1990年、解説委員に就任。NHKスペシャル「あなたが寝たきりになった時」、NHKモーニングワイド「高齢化社会」のキャスター他、多くの番組を担当。2004年、解説委員を退任後も高齢者問題の第一人者として活躍中。

ジェンダーの  
視点から  
人生  
100年時代を  
生き抜く知恵 18

# 天災は忘れる間もなく やってくる

お茶の水女子大学名誉教授 袖井 孝子



(そでい たかこ)

お茶の水女子大学名誉教授、東京家政学院大学客員教授、一般社団法人シニア社会学会会長、一般社団法人コミュニケーションネットワーク協会会長、NPO法人高齢社会をよくする女性の会副理事長。専門は老年学、家族社会学、女性学。主な著書に『変わる家族 変わらない絆』『高齢者は社会的弱者なのか』（以上ミネルヴァ書房）、『女の活路 男の末路』（中央法規出版）、など多数。

◆ ◆  
辰年は荒れるというジンクスがあるそうだが、年明け早々の能登半島地震、そして被災地支援のために飛び立とうとしていた海上保安庁の航空機と日本航空機との衝突事故には驚かされた。突然、命を奪われた方々には、心より哀悼の意を表したい。

「天災は忘れた頃にやってくる」と言われたものだが、最近では忘れる間もなくやってくる。地震についてみると、阪神・淡路大震災（1995年）、東日本大震災（2011年）、熊本地震（2016

年）、そして今回の能登半島地震と、100年に一度クラスの大地震がわずか30年足らずの間に目白押しだ。

崩れる山肌、寸断される道路、横転する車、倒壊した家屋、親しい人を亡くして涙する人、避難所に集まる人びとのうつろなまなざし……こうした映像を私たちは、何度目にしてきたことだろうか。気がかりなのは、地震や津波が原子力発電所に及ぼす影響だ。原発銀座と呼ばれるように、北陸地方には原発が林立している。幸い今回は福島



ような大惨事には至らなかったが、その可能性が皆無とは思われない。

石川県志賀町には、運転停止中の北陸電力志賀原発がある。原子力規制委員会は、「大きな異常はない」と発表しているが、外部電力の一部を喪失し、変圧器からの油漏れや核燃料プールの水漏れがあったといわれる。

志賀原発が建設される以前に、震源地により近い珠洲市には原発を建設する計画があった。だが、住民のねばり強い反対運動のおかげで、原発の建設は中止に追い込まれている。今回の地震によって珠洲市では甚大な被害が発生し、多数の命が失われている。もし珠洲市に原発が建設されていたら、どれほど多くの犠牲が生じていたことだろうか、背筋の凍る思いだ。

日本列島およびそれを囲む海面下には、縦横無尽に活断層が走っている。地震が頻発するものも無理はない。地震大国の日本で、原発を再稼働させるだけでなく、新たに建設しようという政府の方

針には、あきれるとともに怒りさえ覚える。

地震研究において日本は世界のトップレベルといわれる。それにもかかわらず、大地震の発生を予知することは難しい。

近年、能登地方では小規模な地震が頻発しており、その回数は年を追うごとに増してきていた。

こうした傾向から、大地震の発生を予測できなかっただろうか。少なくとも行政や医療福祉関係者の間で情報が共有され、準備が整えられていたら、ある程度まで被害を抑えられたのではなからうか。

このところ世界各地で、地震、水害、台風、竜巻などの自然災害が頻発している。気候変動もたらす高温や乾燥による大規模な山火事も注目される。これまで人間は、自然を克服し、人工的な建造物を建てることで文明社会を築いてきた。

近年、自然災害による被害が増加しているのは、自然は克服できるといって人間の驕りへの仕返しかもしれない。自然に逆らうことなく、自然と共生し、自然から学ぶことの必要性を痛感させられる。

# 「地域助け合い基金」で 地域共生社会をつくりましょう

皆様からのご寄付をお待ちしています

「地域助け合い基金」は、地域共生社会実現のため、地域における住民主体の助け合い活動を支援する基金です。日本国内の活動が対象で、高齢者、子ども、障がい者、生活困窮者、外国人ほか、分野は問いません。また、支援したい市町村（区は東京都の特別区）をご指定いただくこともできます。

自由で楽しく、しっかりとした活動を広げるため、皆様のご寄付をどうぞよろしくお願い申し上げます。

## <ご寄付の方法>

### (1) 銀行振込・郵便振替によるご寄付

※お振り込み先は、裏表紙をご覧ください。

※銀行お振り込みの場合は、送金者の情報がカタカナ表記のお名前のみとなるため、当財団発行の領収書が必要な場合や地域の指定をご希望の場合は、お手数ですが「寄付申込書」を当財団宛お送りください。当財団へのお電話でも承ります。

※ゆうちょ銀行（郵便局）の場合は、通信欄に、ご指定がある場合の市区町村名（区は東京都の特別区）と、一言応援コメントなどをご記入ください。また、手数料不要の払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。

### (2) クレジットカードによるご寄付

当財団ホームページよりお申し込み下さい（関連→19ページ）。

## <税制上の優遇措置>

当財団にいただいたご寄付は、税制上の優遇措置の対象となります（当財団発行の領収証が必要となります）。

助成応募については、当財団ホームページをご参照ください。

「寄付申込書」「パンフレット」なども、ホームページからダウンロードできます。

<お問合せ>  
地域助け合い基金担当

電話：(03)5470-7751 FAX：(03)5470-7755  
メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

# 新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、  
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、  
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。

さらに、全国自治体が地域支援事業で取り組んでいる  
住民主体の助け合いの地域づくりも強力に支援しています。

どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

- **ご支援ありがとうございます。**

さわやかパートナー（賛助会員）・  
ご寄付者の皆様のご紹介

- **さわやか活動日記（抄）**



# ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。

新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2023年12月1日〜12月31日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合がありますご了承ください。

## さわやかパートナー個人 (43件)

(都道府県別50音順)

北海道	丹澤 泰夫	古賀 啓子
鍵政 弘子	西原 清隆	妹尾 信二
八木橋 道子	横地 泰公	高橋 秀和
福島県	東京都	中島 晰
矢吹 道徳	姉崎 猛	福江 孝夫
群馬県	伊藤 由美子	箕輪 久美子
高橋 恵理	遠藤 英嗣	茂木 克美
埼玉県	大石 芳野	山梨県
佐藤 幸策	大泉 喜代子	石田 義愛
菅谷 雄一	澤 美杉	長野県
田中 茂利	鈴木 裕子	古川 静男
平野 方紹	田所 裕二	静岡県
千葉県	辻村 哲夫	花山 勝重
石井 榮一	藤田 庄子	愛知県
北田 仁則	山崎 威司	笠原 盛泰
清水 勇男	神奈川県	堤 孝雄

## 大阪府

前東 ふみ子

植木 茂

高橋 度

奈良県

二井矢 道生

湯川 基子

西井 久

広島県

## さわやかパートナー法人 (3件)

(50音順)

株式会社エーシーエ設計  
医療法人社団ケイセイ会  
パークサイドクリニック  
日本フレイバー工業株式会社

## 一般ご寄付 (13件)

(50音順)

石福ジュエリーパーツ株式会社 (3万円)  
NPO法人サポートばんぶきん (1万円)  
堤 孝雄 (4万円)  
長山 文美 (3千円)  
野芥校区社会福祉協議会 (3千円)

## 地域助け合い基金ご寄付 (1件)

(ご寄付日付順)

いきがい・助け合い  
オンラインフェスタ2023一同  
(162万1000円)

※チャリティーフェスタとして開催した「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2023」の参加費と同額を地域助け合い基金に拠出いたしました。皆様のご参加に感謝申し上げます。

2024.2 ちよらわ • 26 •

# さわやか活動日記(抄)

みんなで、住民の声と力を

生かす地域づくりを！

column

担当 常務理事、共生社会推進リーダー・鶴山 芳子

「どうやって住民主体の地域づくりを推進するか」。全国の市町村やSCの課題であり目標でもある。生活支援体制整備事業がスタートして約9年、各地でSCたちが協議体と共に懸命に仕掛けをしている。そして、住民の反応を見て聞いて感じ、次の仕掛けを検討する。地道な仕掛けの繰り返しで主体的な住民を見つけ、仲間づくりが始まり、住民主

体の地域づくりが動き出す様子を各地で体感し、住民の力に感動するSCや行政の様子を見て、私も一緒に感動している。

各地の実践から、住民が主体的に動き出すポイントが「心を動かす」ことだと思っている。そのスイッチを押す有効な方法は、住民同士で話し合う機会(ワークショップ)や住民の生の声による思いを聞く機会だ

地域支援事業の活動報告は、このページのほかに当財団ホームページにもアップしています。ぜひご覧ください。

SC生活支援コーディネーター

と実感している。

ワークショップのポイントが、できるだけ暮らすエリアが身近な人同士で話す設定にすること。「Aさんが認知症かしらと気になっている」などと、「気になる人やコト」が具体的な共通課題であるため、共感が生まれて話が熱がこもって

いく。しかし、身近なエリアは「本音は言いにくい関係」でもある。そこで、まずはフォーラムなどで幅広く住民に声をかけ、関心のある人が集う機会をつくり、さらに勉強会へ手上げ方式

で参加者を募る。そのため、ワークショップを行う勉強会は地域づくりに思いを持つ住民の参加となる。困りごとはすぐには出ないが、話し合う機会を重ねるとお互いに心を開き始め「実はね」と本音が出て、メンバーの心に響く。

毎月1回、4回のワークショップを行ったある地域での3回目の勉強会の様子を紹介したい。ご近所の認知症の人を支援している女性が、「実は私も限界」と悩みを吐露した。それを聞いたメンバーは「いつもよ

くやっていると思ってたけど、そんなに困ってたの」と驚き、同時に「何とかしよう」と発言。悩みを発言した女性は「聞いてもらってよかった」と安堵の表情を見せた。「言ってよかった」という安心感が生まれ、「話してくれてありがとう」の共有で絆が深まった。

また、別のある地域では、

3回のワークショップで思いを語り合った住民が、勉強会終了後も熱が冷めず話し込む姿があった。心がつながり、「一緒にやろう」という仲間づくりへ進んだのだ。さらに話し合いを支援していけば、仕組みづくり等主体的な動きにつながるであろう。

フォーラムや勉強会では、思いを持った住民の生の言葉が住民の心を動かす。どんなに優れた講師よりも、本気の思いは心に刺さる。それは「我が地域をもっと良くしていきたい」「人に喜んでほしい」という真摯な言葉だからである。そして、そういった心を持つ住民はどの地域にも必ずいて、

輝いて見える。そんな住民の声や力を生かせれば住民主体の地域づくりは動き出し、そこから広がっていく。それは、社会とつながり自分を生かす幸せを実感する住民が増えることになる。住民を信じて仕掛けてみませんか。そして、地域づくりに参加しませんか。

各地・各事業の取り組みをご紹介します

活動の創出と充実を目的に

## SC・行政担当者現場視察研修

■ 埼玉県

〔12月14日〕「令和5年度 埼玉県生活支援コーディネイネ

ーター・行政担当者現場視察研修」が行われ、当財団



もファシリテーターとして協力した。参加者は88名。当研修は、住民活動実践者やSC等から話を聞き、また、参加者同士で意見交換をすることで、活動の具体的なイメージを獲得し、住民同士の支え合い活動の創出と充実を目指すことを目的

に毎年行われている。研修は、活動の現場の様子を撮影した動画が事前配信され、それを見た上で、研修当日は、現場視察研修の担当SCや活動者が登壇し、事前に寄せられた質問に基づいてファシリテーターが質疑応答で活動のポイ

ントを深掘りする形式で実施する。今回登壇したのは以下の5団体。①川越市新宿町五丁目自治会（川越市・さまざまな地縁活動を実施）、②スマホットサロン（桶川市・スマホを通じた集いの場）、③オレンジカフェについてツアー（本庄市・デマンドタクシーの移動支援）、④ささえ愛チームこだま（本庄市・第2層協議会によるラジオ体操の集いの場の普及）、⑤コミュニティカフェ「一休さん」（群馬県高崎市・空き店舗を活用した居場所）

働きかけたのか」等。今回登壇した団体の活動は、リーダー的な活動者が生み出した活動ではなく、さまざまな人や資源や制度を生かし、つなげていくことで生み出されたという特徴があった。

例えば、①の活動は自治会以外の人でも参加可能で、集会所を「町内公民館」に登録し市から助成金を受けると、集会所をバリアフリー化し認証を取って「老人憩いの家」の登録をし光熱費の助成を受けるなど、自治会費以外で活動資金を得ることで、誰でも受け入れられる仕組みとしている。また、有償ボランティアの担い手も、利用会員としてだけでなく提供会員としての

登録も働きかけ、担い手確保につなげている。既存制度の活用や、地域の人にさまざまな出番をつくることにより自治会活動を活性化させており、都市部でありながら自治会加入率は89・7%となっている。

③のタクシーを活用した外出支援は、移動手段がない声に対応し、タクシーという柔軟に対応できる資源を使い、乗り合いという形式にすることで有料でも割安で移動手段を確保した。協議体委員が知り合いのタクシー会社に掛け合い、協議体で話し合いを重ねて実現に至った。

空き店舗を活用した⑤の活動にも関心が寄せられた。

きかけていくためには、地域に出ることが必要となってくる。地域に入り、そのニーズを把握し、地域のさ

まざまな人材や資源を知ることがその一歩であり、行政は制度面も含めてその後方支援をしてほしい、とコ

メントした。(岡野 貴代)



## 生活支援コーデイネーター養成研修「応用編」開催

### 目指す地域像とその実現を考える

#### ■北海道

〔12月12日〕北海道主催「北海道令和5年度生活支援コーデイネーター養成研修『応用編』」がオンラインで開催され、当財団も協力。帯広、旭川、網走の3会場からSCと行政担当者33名が参加した。

医療経済研究機構の服部真治氏の講義「評価指標の考え方と作り方について」の後、グループワークを実

施。各グループで目指す地域像を考え、その実現に向けてどんなことに取り組みかを考え、その進捗をどのようにして把握するかを検討した。

認知症になっても住民同士で支え合えるまちであるためには、住民が認知症についての理解を深め、認知症のひととの交流を深め、認知症の人の支援を拡充して

いくことが重要で、具体的には例えば「認知症の見守りネットワークを構築しよう」「認知症についての講座を開催しよう」「出前講座を実施しよう、住民同士の支え合いにおいては認知症に特化しない交流を増やそう」などさまざまなアイデアが出た。ほかにも「健康状態にかかわらず、困りごとがあっても安心できる

暮らしを目指すためには、地域で気にかかけ合い見守りができていること。要介護になってもサロンに参加できることが望ましい」という発表もあった。

具体的にどんな取り組みをするか考える段階では、日頃から地域に出ているSCの皆さんだからそのアイデアが次々と出された。高齢者の孤立に関することや、「助けて」と言える地域にしたい、という意見などもあった。

研修の場が参加者同士の交流の場にもなっており、それぞれ近い自治体同士の集まりでもあるので、協力関係が築かれることを期待したい。(編集部)



## 生活支援コーディネーター連絡会議開催 北海道ブロックのインストラクターも協力

### ■北海道

〔12月18日〕北海道社会福祉協議会主催「北海道の生活支援コーディネーター連絡会議」がオンラインで開催され、道内のS Cと行政担当者約60名が参加。北海道ブロックのさわやかインストラクター、澤出桃姫子氏、本田徹氏、丸藤競氏、山本純子氏と当財団がグループワークで協力した。

事例動画は、①北海道広尾町「広尾町における支え合いの仕組みづくりに向けた活動紹介」で、継続的に取り組んだこと、住民の意識が変わっていったことなどについて。②兵庫県丹波市「注文をまちがえる喫茶店だんない」は、人づくりから地域づくりにつながっていることについて。③北海道中頓別町「なかとんべつライドシェア」は、ライドシェアが日本でまだ認められていない中、道路運送法に抵触しない範囲で実施していることの説明。

参加者からの質問に対して、それぞれの事例発表者がその場で答える時間を設けており、ライブ感あふれる連絡会だった。グループワークは11グループに分かれて、課題に感じていること、重点的に取り組

り組んでいること、成果が出ていることを話し合った。各グループ内での自己紹介は、当財団ツール「たのみちゃんパンフレット」を活用し、どのタイプだったかも発表しながら行った。お互いに具体的な悩みを共有し、自分の地域での取り組みを紹介している様子だった。

発表で、「人材不足の解決策として、民間も含めて地域の多様な主体とつながりをつくっていくことが大切だと思った」「移動について困っているが、大学生を巻き込んだり、運転能力向上講習をしている」「協議体を今後立ち上げていくが、協議体という箱からつくるのではなく、どんな役割を協議体で担うのかをよく考えて、小さな単位からモデルをつくっていく方法もある」「有償ボランティアについて、正しく理解してもらわないとヘルパーと勘違いする人がいる」「町内会単位で講演会を繰り返したところ、やる気になってくれる町内会に出合えた」「担い手不足というけれど、もしかしたら諦めてしまつて声かけができていないのかもしれない」等の意見が出た。事例動画を見て実際に丹波市を訪問した人がいたとの情報もあった。

道社協主催行事に、インストラクターと財団、道庁が協力するという良い流れができてきたので、今後も継続してほしい。(編集部)



## 厚生労働省 地域づくり加速化事業に協力

〔12月1日〕

### ■大館市（秋田県）

秋田県大館市で、老健局主導型の地域づくり加速化事業の第1回支援が行われた。テーマは「住民主体のサービスBの推進」。同市は、2017年から生活支援体制整備事業に取り組み、フォーラムや勉強会を重ねるなど住民主体による地域づくりを推進し、助け合いを創出してきた。多様な取り組みをしてきたが、総合事業のサービスBが広がっていないという悩みがあり、本事業に手を上げ、この日

が第1回支援となった。

冒頭に市長寿課の藤原真章課長があいさつし、厚生労働省老健局認知症施策・地域介護推進課の石松香絵係長が事業を説明。次に同市における取り組みについて、市長寿課の田中早霧主査が説明した。

続いて、「住民主体の取り組み」を3つの地域の住民が紹介した。取り組みは除雪、見守り、買い物代行、移動支援など住民たちが地域の困りごとを課題と捉え、SCたちがバックアップしながらみんなで考え取り組

んだもの。「町内を明るくしたい」「全国のモデルになりたい」など前向きな思いとともに紹介され、住民の思いと力を感じた。

その後、当財団が進行し「住民主体の助け合いを広げるためにできることは何か」について、住民、地域包括支援センター職員、第1層・第2層SC、行政が3グループに分かれて議論。これまでの取り組みを共有しながら、広げるために知恵を出し合った。「活発に周知PR活動をしていきたい」「若い人を巻き込むために専門学校へ働きかけてみたい」「大館プロジェクトを立ち上げたい」「補助金も見直したい」等、住民主体の助け合いを広げるた

めのさまざまな方法や気づきを共有。まとめとして厚生労働省の石松係長と長谷川瑛梨係員がコメントし、終了した。

振り返りでは、「盛り上がり楽しかった」「気づきがたくさん生まれた」などの感想を出し合い、次回に向けて参加を呼びかける人たちが、どんな取り組みをしていくか話し合った。検討を進め、2月半ばには第2回支援を実施する予定。

（鶴山 芳子）



〔12月6日〕

■川越市（埼玉県）

厚生局主導型の地域づくり加速化事業として、川越市の第2回支援が行われた。同市は加速化事業において、4つの地域ケア会議の連動と他事業連携も含めた地域課題解決までの見える化を狙いとしている。今回は、第1回支援の出席者（本誌昨年11月号39ページ参照）に加えSCも参加した。

午前は「具体的な課題例

地域で支える」とし、個別課題↓地域課題↓課題解決までの実際の流れの共有を目的に、認知症の人が在宅生活ができなくなった理由を洗い出し、その理由の中で解決したい理由を1つ選択して、その解決のために誰（どの団体）をメンバーに入れるかグループごとに検討した。その結果、理由によって参加してもらうべきメンバーが異なることが共有された。

午後は「地域課題の解決

のための体制について再検討しよう」をテーマに、現行の仕組みの位置付けの見直しを行った。取り組み課題や参加メンバーを企画・検討していく「企画・検討会議」と、それを各圏域ご

とに考える「領域別検討会議」に相当する会議と、実際に活動を行う「実行部隊」が必要で、他事業の会議も含め、同市の既存会議がどこにあてはまるかを次回に向けて整理することになった。

単体の会議の中で解決を目指すのではなく、他事業の会議等も含め「いろいろな人を巻き込んでいく（みんなで解決していく）」という考えを共有した。それを市全体で共有するため、地域ケア会議と既存会議も含めた会議の全体の位置付けを整理していくという方向性も見えた。各会議も、コアメンバーだけでなく課題ごとに参加メンバーを追加するなど柔軟に構成する

という考えが共有できた。

さまざまな会議がある中で、その位置付けを整理し全体で共有できている市町村はまだ多くないと感じている。この支援を通じてそうした全体像のモデルができ、他市町村に参考にしてもらえればと考えている。

（岡野 貴代）

〔12月12日〕

■上勝町（徳島県）

老健局主導型の地域づくり加速化事業として、徳島県上勝町で第2回支援が行われた。第1回支援会議の気づきから、関係者が話し合いの場を持ち、1・5次ミーティングで議論して内容を組み立てた。

午前は2チームに分かれて行動。1チームは町で介

護保険事業等を担っている社会福祉法人で説明を聞いた。もう1チームは旭地区の「名総代」（神社を核とした地縁組織代表者）を訪問して地域のことを学んだ。

午後は、厚労省老健局認知症施策・地域介護推進課地域づくり推進室企画調整係の門田翔一氏が事業説明。続いて、同町住民課の榎本崇史氏が町の現状と課題等を説明。「申請者は『下肢筋力による申請』が多くみられるため、介護予防を早期から展開する必要性」

「3割の高齢者が介護サービスを利用していない状況から、今後、住み慣れた地域で未永く暮らしていくために何が考えられるか」等、問題提起した。

その後、当財団の進行で「高齢者が元気で望む暮らしを続けるために」をテーマに多様な関係者（一般社団法人、包括、社会福祉法人、民生児童委員、老人クラブ、国民健康保険運営協議会、町住民課、教育委員会、県、厚生局、厚労省）

が2チームに分かれて議論アイズブレークで当財団の「助け合い体験ゲーム」を行った。笑いが起こり、和気あいあいとした雰囲気となった。その後、「目指す地域像」の実現に向けて、まずは「地域にある助け合いや強み」について話し合った。次に「足りない活動や住民が欲しいと思う活動」「復活したいこと」も含めて知恵を出し合った。「集

落単位でみんなで作る居場所」「食事ができる」「移動支援の充実」「内職ができる」など、元氣が出るような楽しいアイデアがたくさん出された。

まとめとして、アドバイザーで東北こども福祉専門学院副学長の大坂純氏が「今あるものを上手に利用すること。また、気づいたことをやってみることが大事。やると次が見える」と

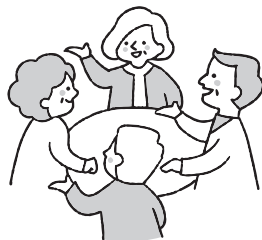
### 社会参加推進事業

## 高齢社会NGO連携協議会 役員会開催

〔12月7日〕2023年度

第3回高齢社会NGO連携協議会（高連協）役員会が、共同代表（一般社団法人日

コメントし、終了した。目指す方向を関係者が一緒に議論することで上勝町のこれからの地域づくりを推進するチームづくりが動き始めた。  
（鶴山 芳子）



本老年医学会名誉会員・元理事長の大内尉義氏、当財団理事長の清水肇子）、理事4名、監事2名、委任状

1名、その他出席（参与1名）でオンライン併用にて開催された。共同代表就任後、初めての役員会となった。

冒頭、清水共同代表がいさつ。続いて、次年度事業の方向性として、他団体との連携によるイベントの実施、および新たに高連協として社会へ発信する提案・提言を行うための会員団体内外へのアンケート実施について説明があった。

次に大内共同代表より、今年6月に愛知県で行われた「第66回日本老年医学会学術集会」において、高連協共催シンポジウムを開催

する旨の提案があった。セッション内容は、本役員会の議論を踏まえて、学術集会主催団体である国立研究開発法人国立長寿医療研究センター理事長の荒井秀典氏と大内共同代表が検討し、あらためて本役員会で議論して決定することとした。

また清水共同代表より、会員団体の負担にならず、しかし貴重なネットワークを生かして高連協の存在を社会に示していくため、会員団体および関係者へのアンケートによる発信を考えた。具体的なテーマ等は追って検討していくことなど

を全員一致で了承した。

本役員会で2024年度事業の方向性が確認された

ことを受け、当財団の社会参加推進事業にしっかりと  
なげたい。（玉置 英明）

### 退職のお知らせ（12月31日付）

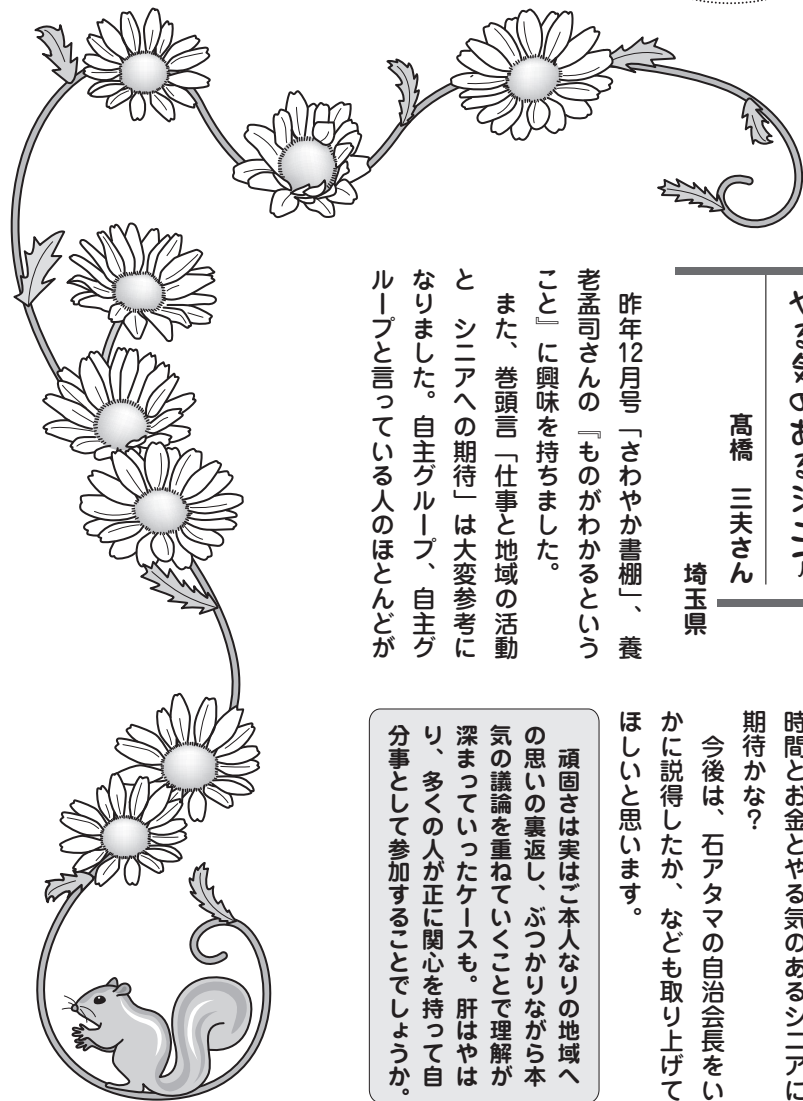
■ 共生社会推進リーダー 澤 美杉さん

澤さんには、自治体職員の経験を踏まえて、2021年4月より新地域支援事業の推進に尽力していただきました。在職中にお寄せいただいた皆様のご支援に感謝いたします。

### 業務より 事だ

● 地域の支援では、現地で関係者の方々に車で送迎していただくことがある。研修生のOさんもさまざまな支援先を訪問する中、地域での車による移動の重要性を痛感したという。そして何と、「将来、地域で何か役に立つかも」と昨年末から自動車教習所に通い始めたそう。仕事の中で気づきを得て、新しいことを始めるなんて素晴らしいね。

# みんなの広場



時間とお金と  
やる気のあるシニア

高橋 三夫さん

埼玉県  
埼玉県

昨年12月号「さわやか書棚」、養老孟司さんの『ものがわかるといふこと』に興味を持ちました。

また、巻頭言「仕事と地域の活動とシニアへの期待」は大変参考になりました。自主グループ、自主グループと言っている人のほとんどが

自分では活動しておらず、これでは説得などできるわけがありません。時間とお金とやる気のあるシニアに期待かな？

今後は、石アタマの自治会長をいかに説得したか、なども取り上げてほしいと思います。

頑固さは実は日本人なりの地域への思いの裏返し、ぶつかりながら本気の議論を重ねていくことで理解が深まっていたケースも。肝はやはり、多くの人が正に関心を持って自分事として参加することでしょうか。





『さあ、言おう』投稿募集

## あなたの意見を社会へ生かそう

『さあ、言おう』は皆様の声を社会につなげる  
問題提起型情報誌です。

### ぜひ皆様の声をお寄せください

『さあ、言おう』では、取り上げたテーマに対する読者の皆様からのご意見・ご感想、あるいは普段気になっているテーマに基づいた体験談や提言などを随時募集しています。

#### 常設テーマ

- 地域の助け合い活動について
- 助け合いの地域づくりについて
- いきがい、社会参加について
- 居場所や地縁組織、NPOの活動について
- 新地域支援事業について
- 生き方について など

#### 投稿の方法

- 字数や回数制限はありませんが、掲載にあたっては誌面の都合上、編集要約する場合があります。あらかじめご了承ください。
- 一般投稿は形式は問いません。本誌添付の投稿ハガキなどもご自由にご利用ください（原稿はお返しできません）。
- 投稿は、事情が許す限り本名でお願いします。  
ただし、掲載時には匿名、あるいはペンネームの使用も可能ですので、その旨お書き添えください。
- 投稿時には、お名前ほかに、ご住所、連絡先お電話番号をご記入ください（内容により質問させていただく場合があります）。性別、年齢もよろしければお書き添え下さい。大変参考になります。

#### 送付先

〒105-0011  
東京都港区芝公園2-6-8  
日本女子会館7階  
公益財団法人さわやか福祉財団  
『さあ、言おう』編集部宛  
FAX (03) 5470-7755  
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp



『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人  
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人  
年会費  
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の優遇措置が受けられます。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の優遇措置が受けられます(さわやか福祉財団は所得税の税額控除対象の公益法人です)。

一般ご寄付を  
いただく場合の  
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856\*

三井住友銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号2754574

みずほ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3383326

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

\*払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。

\*お問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。  
電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

表紙絵から はり絵・池田げんえい

「雪景」雪祭り(北海道)



編集後記 ●助けてほしい人が声を上げることで、周囲に助け合い活動ができていく…これも、助け合いの基本かもしれません(P4～「活動の現場から」)。●「子どもと一緒に地域で輝こう」は、山形県の旧家を活用した自由な居場所です。懐かしい風景に触れに行ってみたくなります(P10～)。●「身体は鍛えるより整える」。そんな健康法も、この寒い時期には特に良さそうですね(P20～「老いの暮らしを創る」)。●お花の水遣りを高齢者と子どもの交流手段に。身近で長続きしそうな、いいアイデアですね(左ページ「新・ひとりごと」)。



助け合いを  
広げよう!



鶴山 芳子

子どもたちが一人暮らしの高齢者宅へ

「鉢植えに水やりします」と訪問し

交流する見守り活動。

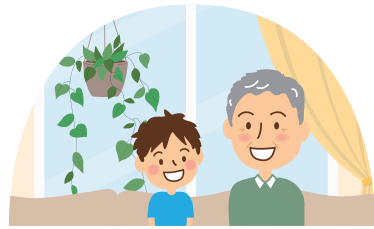
「大人だと気恥ずかしいけど、

子どもだとうれしいんだって」と町内会長。

「よく来たね、ありがとう！って。

うれしかった」と子どもたち。

体験した子どもたちがこれからの地域をつくる。



●公益財団法人さわやか福祉財団常務理事・  
共生社会推進リーダー

各地で住民の思いにふれ感激する日々です。多くの住民  
が求める、世代を超えたつながりが元気な地域をつくっ  
ていきます。皆さんも始めてみませんか。

## （さわやか） 2月号

通巻366号 2024年2月10日発行  
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい  
取材協力 七七舎  
イラスト すずきひさこ  
福島康子

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子  
発行元 公益財団法人さわやか福祉財団  
〒105-0011

東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階

Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755

E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp

<https://www.sawayakazaidan.or.jp>

Printed in Japan

# 能登半島地震の復興に向けた 活動支援を行います 「地域助け合い基金」にどうぞご寄付ください

令和6年能登半島地震の被災地・被災者を支援する地域の助け合い活動について、さわやか福祉財団の「地域助け合い基金」により次の通り支援を行います。ぜひ皆様からのご支援をお待ちしています。

## 「地域助け合い基金」

### 特別対応地域・石川県全域及び県外被災地域並びに県外避難地域

- 現地のニーズを踏まえながら通常のご支援枠を超えて応援します。
- 能登半島地震復興支援のご寄付の場合は、地域を「**石川県**」とご指定ください。当財団のホームページからクレジットカードでご寄付が可能です。あるいは以下の金融機関宛にお振り込みください。金融機関の場合は、お手数ですがホームページまたは電話などにより、**石川県指定ご寄付である旨をお知らせください。**  
(当財団HP「地域助け合い基金」ご寄付受付ページ)  
<https://www.sawayakazaidan.or.jp/fund/tasukeai/form.php>
- 当財団からも活動支援金を「地域助け合い基金」に拠出し、被災地・被災者の皆様に応援する活動を広く支援します。

#### お振り込み先

##### ■ 銀行振込

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団 地域助け合い基金

三井住友銀行 浜松町支店 (普通) 口座番号 7859452

三菱UFJ銀行 浜松町支店 (普通) 口座番号 0095446

##### ■ 郵便振替 (払込取扱票)

加入者名：公益財団法人さわやか福祉財団

口座記号番号 00110-7-709627

- \* 「地域助け合い基金」は、さわやか福祉財団が事務手数料を頂戴することはありません。
- \* 「地域助け合い基金」をはじめとするさわやか福祉財団へのご寄付は、所得税・法人税等の優遇措置の対象となります。
- \* 「地域助け合い基金」では指定地域のないご寄付も常時募集しています。